

イエスは涙を流された

ヨハネによる福音書 11 : 17 - 44



司祭 ヨハネ 井田 泉

大齋節第5主日
2026年3月22日

京都聖三一教会にて

今日は大斎節第5主日。来主日は復活前主日。その次はイースターです。イエス・キリストの死と復活を大切に記憶するこの時期。今日の福音書は、イエスに愛された、またイエスを愛したひとりの人の死と復活を伝えています。その人の名前はラザロです。

ベタニアはエルサレムの東隣の村。ここにマルタ、マリア、ラザロの3人兄弟姉妹が暮らしていました。この3人はイエスと特別な関係にありました。というのは、イエスがエルサレムに来られるたびに宿を提供し、イエスの働きを物心両面にわたって支援していたのです。3人にとってイエスは敬愛してやまない先生であり、またイエスにとってその3人は愛する弟子、協力者、また神様のために働く同労者でした。

けれどもイエスがエルサレムの指導者たちを批判し、その偽善と不法を暴かれたことから、指導者たちとその側につく者たちはイエスを迫害するようになりました。つい最近もこのあたりで、イエスは石で打ち殺されそうになったことがありました。こうした中、イエスと親しい関係にあり、イエスの働きを支えているマルタ、マリア、ラザロも、圧迫や迫害を受けていたことが想像されます。神様を信じてまっすぐに生きようとするがゆえに苦しみを受ける、ということが昔も今もあります。

そのラザロが重い病気になりました。明日の命も分からない

ほどの重篤です。マルタとマリアは、そのとき遠くにおられたイエスに使いを送って、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気です」と伝えました。

それから数日して、イエスは危険を顧みずにベタニアに来られたのですが、すでにラザロは死んで墓に葬られた後でした。

迎えに出たマルタはイエスに言いました。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」ヨハネによる福音書 11:21-22

するとイエスは言われました。

「あなたの兄弟は復活する。」 11:23

この後に大切な言葉が続きます。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」 11:25-26

マルタはイエスに「あなたはこのことを信じるか」と問われて答えます。

「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」 11:27

わたしたちも、家族や親しい人を亡くしたとき、心に涙を流しながら、マルタとともに言います。

「はい、主よ、あなたが神の子、救い主であると信じます。あなたが復活であり命です」。

マルタは家に戻って妹のマリアに耳打ちしました。「先生がいらして、あなたをお呼びです」。家の中には大勢の人たちが慰めに来ていました。マリアが急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思って後を追いました。マリアはイエスを見るなり足もとにひれ伏して言いました。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」 11:32

何も言われなくても、イエスご自身が悲しいのです。自分のためにあれほど尽くしてくれたラザロが亡くなった。どうしてこんなことがあるのか。愛するラザロのゆえにイエスのうちには慟哭が起こっています。しかもマルタとマリアから、「主よ、もしここにいてくださいましたら……」と二度も嘆きの訴えを聞く。

「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを」 ご覧になりました。姉妹の悲しみと人々の悲しみが一つになって、さらにイエスに押し寄せて来ます。

イエスが「どこに葬ったのか」と言われると、彼らは「主よ、来て御覧ください」と言いました。

「主よ、来て御覧ください」

イエスに来てほしい。イエスに見てほしい。悲しみの場所に、来て、見てほしいのです、イエスに。これは、大切な人を失ったときのわたしたちの思いでもあります。

その続きに、見逃すことのできないことが記されています。

「イエスは涙を流された。」 11:35

イエスのうちにかろうじて閉じ込められていた感情はもう限界を超えて、涙となって溢れ出しました。「**イエスは涙を流された。**」これは聖書全体の中で最も短い節の一つです。多くの英語の聖書では、“Jesus wept”とわずか2単語です。この一言に、イエスがどのような方であるかがはっきり現れています。イエスはわたしたちの悲しみのために泣かれる方です。涙を流してくださる方です。

「ユダヤ人たちは、『御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか』と言った。しかし、中には、『盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか』と言う者もいた。イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。」 11:36-38

ここで気になる言葉があります。「**イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。**」

先ほどは触れなかったのですが、前の 33 節にも「**心に憤りを覚え、興奮して**」と書いてありました。イエスのうちに、深い

悲しみとともに激しい憤りが起こっている。

こういうことではないでしょうか。人々がラザロの死を前にして、絶望的に嘆いている。その嘆きにはイエスもともに嘆き涙を流されるのです。しかし人々が悲しみに圧倒されて、もう何の希望もないかのように打ちひしがれているとき、それをせせら笑っている悪しき存在がある。権力を持った人たちにとって、イエスは反逆者、秩序破壊者です。そのイエスを支援してきたラザロが死んだ。それを闇の力は喜んでいいる。結局この世界には、神の愛も救いも無力であると思わせて、人々を絶望と滅びに引きずり込む悪魔のせせら笑い。これをイエスははっきりと感じ、認識して、それに憤激された。死が最後ではない。滅びが宿命ではない。悪が最後の勝利者ではない。愛と正義の神が生きておられる。神が人を生かされる。それを悲しむ人々は知らなければならないのです。

イエスはラザロの墓の前に来て、石を取りのけさせられました。そして大声で叫ばれました。

「ラザロ、出て来なさい」 11:43

「すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。」 11:44

イエスが全身全霊で呼ばれるとき、呼ばれた者は出て来る。イエスが生かしてくださるとき、人は生きる。それがその場で

起こることがあり、また後に起こる場合がある。しかしイエスに呼ばれて起こされることは同じです。

わたしたちが悲しみ、不安、疲れ、失望の連続で身動きできなくなったとき、わたしたちを愛しておられるイエスは、わたしたちの名を呼んで、命へと引き出してください。イエスはわたしたち一人ひとりを呼び出されます。弱った教会に呼びかけて新しい命に生かしてください。

祈ります。

ラザロを愛し、ラザロと姉妹たちのために涙を流された主イエス様、あなたはわたしたちをも愛していただきます。わたしたちが悲しみや疲れ、失望で力を失うとき、どうかわたしたちのところに来てください。わたしたちに呼びかけ、呼び起こしてください。そしてラザロたちがきっとそうであったように、あなたの愛の働きに再び加わらせてください。また罪なくして命を奪われた子どもたちを顧みてください。悪しき力から、また失望からわたしたちとこの世界をお守りください。わたしたちのために死に、復活されたあなたの御名をたたえます。アーメン